

Title	上部域にすむヤクザルの生態学的研究(III 共同利用研究 2.研究成果)
Author(s)	好廣, 真一; 大竹, 勝; 増井, 憲一; 黒木, 一男
Citation	霊長類研究所年報 (1985), 15: 42-42
Issue Date	1985-10-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/163563
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

活動時間割合に大きな群間変異があることを報告し、遊動域内の森林構造の差異と群れの森林利用形態の差異をその要因として指摘した。

1983年7月に本山A群は2群に分裂し、ほぼ1年後の84年5月でも2群の遊動域の分離はほとんど進まず、互いに同じ遊動域を遊動していた。昨年と同じ葉食を中心とする5月期のそれぞれの群れの採食植物種は23種、28種であった。両群に共通するのは17種であった。スキニング法による採食時間割合も加味した食物種上位10種についての共通度は64%であった。また活動時間のなかで採食の占める割合はそれぞれ21%と同じであった。ちなみに、昨年の同時期の分裂前の本山A群では、採食時間割合は29%であった。

群間の変異を正しくとらえるためには、群内の個体間にみられる食物選択の実態を明らかにせねばならない。アルク群において、2個体同時連続追跡を行った。同家系内のメス2頭、異家系間のメス2頭を組み合わせとして選び、個体間の距離、採食種、周辺個体、音声のなきかわしなど群れ内の分散の状況を具体的に調査した。家系内の個体間距離は、家系間よりも小さい。道路沿いの調査区を群れがどのように通過してゆくかを定点観測すると、家系集団のまとまりをゆるやかに保ちながら次々にあらわれては採食していたが、家系集団内の採食活動の同期性はさほど高くはなかった。同家系内の個体間にみられる食物選択の変異の巾よりも、異家系間の個体のほうがより変異の巾がせまいような印象が得られた。

このような群間や個体間にみられる食をめぐる変異が、食物選択の大巾な自由のなかで生ずるものなのか、あるいは、群れ内の個体間干渉や群れの採食活動の伝統的な差異によるためなのかを結論づけるには、今後もより詳しい調査研究が必要である。

上部域にすむヤクザルの生態学的研究

好廣真一（龍谷大・経営）・大竹 勝（日本モンキーセンター）・増井憲一（京大・理）・黒木一男（泰星高）

課 題 4 （本年度は延期）

課 題 5

チンパンジーの自己認知の研究

北原 隆・安枝三哲（上智大・理工）

霊長類における鏡像の自己認知および自己意識については、次に述べるいくつかの対立する見解が出されている。①類人猿には人間の自己意識に相当する能力があり、サル類には認められない（Gallup, 1970）。②オペラント学習によって自己の鏡像に対する反応がハトにも可能であり、“自己意識”をもち出す必要はない（Epstein, 他, 1981）。③自己鏡像の反応にみられる類人猿とサル類とのちがいは、複合感覚統合能力のちがいで説明できる（室伏, 1978）。

本実験は、チンパンジーとマントヒヒを用いて③の仮説を実験的にたしかめることにあつた。チンパンジーでは、オトナメス2頭とアカンボウ2頭の集団を、マントヒヒでは2頭のペアを対象に、マジックミラーの装置を用いて、ビデオおよび直接観察による行動の記録・分析を行った。実験は2月20日～3月6日、および4月1日～4月10日の延17日間行い、次の結果がえられた。

チンパンジーでは、鏡提示直後にみられる社会的反応の頻度は、ギャロップの結果より極端に少なかった。さらに、自己鏡像に向けられる反応が成立する前に、手や足、顔などの体の一部分をくり返し動かすだけの社会的意味不明の反応とそのさいの手や体の動きに視線を集中させる興味深い反応がみられた。また、チンパンジーのアカンボウおよびマントヒヒにおいては、社会的反応のみで、自己鏡像に向けられる反応は認められなかった。そして、これらの個体では、チンパンジーのオトナの場合と異なり、自己鏡像に対して視線をしばらく固定する、あるいは次々と視線を移動させることが認められなかった。

以上の結果は、不十分ながら③の仮説をうらざるものといえよう。今後は、視線の使い方の定量化と共に、チンパンジーの社会的発達との関連を考えてみたい。